

## 2015年度(第1回)

## 日本セラミックス協会フェロー表彰

2010年の公益社団法人への移行後、本会は中期経営計画を策定しその中で、「表彰制度の在り方の見直し」を掲げ、表彰制度検討委員会を設置して検討を進めて参りました。その結果、協会創立125周年である本年から、新たに「日本セラミックス協会フェロー表彰」制度の導入をはかることになりました。

本フェロー表彰は、本会における継続的な活動を通じて、セラミックス分野の発展に顕著な業績を挙げた本会個人会員を本会として称え、日本セラミックス協会フェロー(英語名称: CerSJ Fellow)の称号を授与することで、本会を代表するに相応しい会員としての活動を続けていただくとともに、本表彰により会員の本会活動に対する参加意欲の増大を促し、セラミックス分野の更なる発展を図ることを目的としています。

フェロー表彰規程ではフェロー候補者の推薦はフェロー5名の推薦を必要とすることになっていますが、推薦有資格者のフェローが一定の人数に達するまでの暫定処置として、フェロー表彰候補者の推薦方法は、事務局で作成した候補者リストによることがフェロー表彰規程付則で定められております。創設の年にあたる本年は、フェロー表彰候補者選考委員会を組織し、候補者リストより慎重な審議を行い、受賞候補者として次の43名の方が理事会に推薦され、2015年11月26日の理事会で最終的に受賞者として決定いたしました。ここに各受賞者のフェロー表彰推薦理由を紹介します。

なお、表彰式は、6月3日(金)東京(霞が関ビル内 東海大学校友会館)において開催の第91回定時総会後に行われました。



## 受賞者一覧

(43名 氏名五十音順)

明渡 純	小川 哲朗	鷹木 洋	水谷 惟恭
幾原 雄一	春日 敏宏	高田 雅介	南 努
井関 孝善	加藤 一実	田中 順三	三宅 通博
伊藤 節郎	木島 式倫	中尾 泰昌	宮山 勝
井上 悟	吉川 信一	新原 皓一	村山 宣光
今中 佳彦	河本 邦仁	丹羽 紘一	安井 至
打越 哲郎	阪井 博明	野上 正行	安田 榮一
大田 陸夫	坂部 行雄	平尾 一之	山岸 千丈
大槻 主税	目 義雄	平野 眞一	山本 茂
大橋 直樹	芝崎 靖雄	舟窪 浩	渡利 広司
岡田 清	陶山 容子	牧島 亮男	

あけど じゅん  
明渡 純氏

明渡 純氏は、セラミックス微粒子が常温で高強度に固化する常温衝撃固化現象を発見、エアロゾルデポジション(AD)法と呼ばれる実用的な高機能セラミックスコーティング手法の基盤技術を確立。国家プロジェクト等を通じ、産業界への技術移転に成功、半導体製造装置用プラズマ耐食コーティングで高い世界シェアを実現した。国際的に溶射技術分野、電子デバイス応用、エネルギー関連部材応用、医療部材応用にも大きく影響を与え、セラミッ

クス誌編集委員長、学術論文誌編集委員長等を歴任して本協会活動にも貢献してきた。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

略歴 昭和59年早稲田大学工学部応用物理学科卒業。同63年同助手、平成3年工業技術院機械技術研究所、同13年(独)産業技術総合研究所グループ長、同22年上席研究員(兼)グループ長、同25年首席研究員、同27年先進コーティング技術研究センター長。



いくはら ゆういち  
幾原 雄一氏

幾原雄一氏は、最先端透過型電子顕微鏡法と第一原理計算手法を高度に融合することで、界面・転位の原子・電子状態を多角的かつ定量的に評価・解析する手法を世界に先駆けて提案し、種々の材料における特性と界面・転位の原子構造との相関性を解明した。これより、これまで不明であった材料機能の発現メカニズムを原子レベルで明らかにし、酸化物界面におけるドーパントメカニズムの解明、粒界超構造の発見、転位芯原子構造の解明等多くの成果を得た。ま

た、本協会においては、学術論文誌編集委員長、理事、学術写真賞選考委員長等を通して、その活動に貢献した。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和63年3月九州大学大学院総合理工学研究科博士課程修了(工学博士)。同年7月JFCC入所、同統括部長代理、東京大学助教授を経て、平成15年1月東京大学大学院工学系研究教授、JFCC 主管研究員。



いせき たかよし  
井関 孝善氏

井関孝善氏は、高温下あるいは高放射線場のような過酷な環境下で性能を発揮できる耐過酷環境材料を開発する研究、具体的には炭化けい素の研究、セラミックスの接合、セラミックスの放射線損傷の研究等教育・研究に顕著な功績を残し、これらの成果は産業界の材料開発に貢献した。産学共同として、日本学術振興会高温セラミック材料第124委員会の庶務幹事を23年の長期にわたり務め、また通産省の省エネルギー技術開発推進のため、

セラミックガスタービンの開発プロジェクトに貢献した。協会活動としては、長年評議員や理事(企画担当、高温構造材料部会長等)を務めた。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和38年3月東京工業大学工学課程卒業、同43年3月同大学院博士課程化学工学専攻修了(工学博士)。同助手、助教授を経て、同57年12月教授、平成13年3月同学退官、名誉教授となる。



いとう せつろう  
伊藤 節郎氏

伊藤節郎氏は永年にわたって、大学および企業において機能性ガラスの研究開発に従事し、ガラスの科学・技術の発展に多大な貢献をした。氏は多岐のガラス分野において、独創的な概念に基づき新規なガラス材料を開発してきた。また、ガラスの変形や破壊に関する一連の研究は学術的に高く評価され、日本セラミックス協会学術賞を受賞し、米国セラミックス学会フェロー、世界セラミックスアカデミー会員に選ばれた。一方、国際ガラス

委員会統括技術委員や本協会理事として活躍し、産業界と学界をつなぐ懸け橋として大きな役割を果たしてきた。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和49年3月京都大学大学院博士課程修了。同年7月~同59年8月同大学化学研究所助手、同59年9月~平成26年10月旭硝子(株)、同22年4月~同26年3月東京工業大学特任教授。



いのうえ きたろ  
井上 悟氏

井上 悟氏は、ガラスプロセス技術部会主査としてガラス産業連合会活動の推進に寄与し、ガラス熔融エネルギーを大幅に削減し得る革新的なガラス熔融技術開発プロジェクトリーダーとして、従来の半分以下のエネルギーでガラス熔融が可能な気中溶解ガラス熔融技術開発に貢献した。ガラス研究では、均質迅速定量評価法、新ガラス高速探索コンビナトリアルガラス研究手法、電気化学手法を活用したガラス表面ナノ構造付加技術を開発した。

また、協会活動においては、学術論文誌編集委員、教育委員会委員、セラミックス誌編集委員長として広報活動推進に貢献した。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和52年4月東工大工学部無機材料工学科助手、平成元年4月無機材研第9研究グループ主任研究官、同13年4月物質・材料研究機構主幹研究員、同20年4月ナノ物質ラボ長、同24年4月同学術連携室長。



いまたか よしひこ  
今中 佳彦氏

今中佳彦氏はウェアラブル機器の高性能化・スーパーコンピュータの高速化のために、電子セラミックスと金属配線からなる多層構造を低温で形成する技術を創成する等、エレクトロニクス実装分野での電子セラミックスの材料・プロセスの研究開発でセラミックス界に貢献した。この多層LTCC技術を体系化した専門書を世界に向けて出版(英語・中国語)した。協会活動では、さまざまな分野のセラミック製品を「セラミックスアーカイブス」

として系統的にまとめ、さらに英文書籍化し、協会のプレゼンスを向上させた。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和58年九州大学工学部卒業。同年富士通(株)入社。平成6年米国リーハイ大学大学院材料科学・工学専攻修士課程修了、同11年九州大学大学院総合理工学研究科博士課程修了。現在、(株)富士通研究所デバイス&マテリアル研究所主管研究員。



うちこし てつお  
打越 哲郎氏

打越哲郎氏は、微粒子粉体の物理化学現象を利用した材料化プロセス技術の開発を専門とし、特にセラミックス粉体のコロイドプロセスでは精力的に研究を行って、「液中帯電粒子の電気泳動を利用した成膜・成形プロセスの高度化」の業績で、平成24年度日本セラミックス協会学術賞を受賞している。また、これまでに、本協会の運営委員、理事、評議員、標準化委員会委員長、原料部会副会長、論文誌編集委員、協会誌編集委員、基礎科学部

会幹事などを務め、同26年度論文誌査読貢献賞を受賞する等、協会活動にも広く貢献している。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和61年早稲田大学理工学部金属工学科卒業。同年同大学鋳物研究所個人助手、同62年金属材料技術研究所研究員、平成23年物質・材料研究機構グループリーダー、北海道大学総合化学院客員教授、博士(工学)。



おおた りくお  
大田 陸夫氏

大田陸夫氏は、ニューガラスフォーラム第6回ニューガラス国際シンポジウム(1997)運営委員長、データベース推進委員会(2001~2003)委員長、NEDOプロジェクト事後評価分科会(2006)委員長、日本セラミックス協会学術論文誌編集委員会委員長(1989~1991)、第30回ガラスおよびフォトニクス材料討論会(1989)運営委員長、第8回秋季シンポジウム(1995)運営委員長、ガラス部会長(2002~2004)、第20回国際ガラス会議(京都大会)(2004)組織委員長、日本セラミックス協会関西支部支部

長(1994~1996)等を歴任。以上、本会における継続的な活動を通じて、セラミックス分野の発展に顕著な業績を挙げた。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和41年京都大学大学院修士課程修了。同年京都大学工学部助手、同47年UCLA(地球物理学)交換研究員、同52年同上(材料工学)交換研究員、同61年京都工芸繊維大学教授、平成15年同工芸学部長、同17年定年退職、同大学名誉教授。



おおつき ちから  
大槻 主税氏

大槻主税氏は、セラミックスバイオマテリアルの高機能化に関する数多くの研究を行い、多大な貢献を果たしてきた。特に、生体活性セラミックスが骨に対して高い組織親和性を示す現象を材料化学の視点から解明し、その知見に基づいて、金属材料への生体活性の付与、生体活性な有機-無機ハイブリッドや生体吸収性材料の開発を行った。さらにバイオミネラルに立脚した材料合成等の研究を展開し、生体に関連したセラミックスの分

野を先導する成果をあげた。また生体関連材料部会幹事、部会長等を務め、本協会活動へ多大な貢献を果たしている。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和61年3月京都工芸繊維大学工学部卒業、平成3年3月京都大学大学院理学研究科研究指導認定退学。同4年4月京都大学助手、岡山大学、奈良先端科学技術大学院大学を経て、同18年4月より現職。



おおはし なおき  
大橋 直樹氏

大橋直樹氏は、導電性セラミックス、ワイドバンドギャップ半導体薄膜、酸化物単結晶などの合成と、電気的、磁氣的、光学的特性評価を通じ、セラミックスの化学組成や構造と物性・機能との相関を明らかにする研究をすすめ、特に、欠陥・ドーピングや粒界・界面の視点からセラミックス科学の進展に寄与してきている。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 平成4年6月東京工業無機材料工学専攻博士課程修了。同5年4月同無機材料工学科助手、同11年7月米国・MIT客員学識者、同12年7月無機材質研究所、同13年4月物質・材料研究機構、現在に至る。



おかだ きよし  
岡田 清氏

岡田清氏は、各種出発原料からのムライトの相形成反応の解明、ムライトとムライト基複合材の特性評価、ムライト多孔体の環境機能材料の作製等を通してムライトセラミックスの研究の進展に貢献した。原料部会、基礎科学部会、生体関連材料部会等の部会活動に協力するとともに、学術論文誌編集委員長、総務理事、副会長および会長として協会活動へ貢献した。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和51年3月東京工業大学大学院理工学研究科博士後期課程修了。同52年8月同大学助手、同61年5月助教授、平成4年4月教授、同21年4月同大学応用セラミックス研究所長、同23年10月理事・副学長。



おかわ てつろう  
小川 哲朗氏

小川哲朗氏は合成ヒドロキシアパタイトセラミックスの量産技術を確立し、人工骨、クロマトグラフィー吸着材等の事業化に成功、製品は医療やバイオ分野で幅広く利用され、バイオセラミックス産業の育成に貢献した。また、種々のリン酸カルシウムの合成、キャラクタリゼーションに関する研究を通じて、細胞、ウイルス、DNA、タンパク質との静電相互作用に基づく吸着作用を明らかにし、基礎・応用研究を推進した。これまでにセラミッ

クス編集委員、生体関連材料部会幹事、部会長、学会理事等を務め、協会活動全般にも貢献してきた。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和54年東京農工大学工学部工業化学科卒業。ペンタックス入社、Yale大学研究員、同社ニューセラミックス開発部長、Laboratory Skin Care, Inc. 副社長、平成22年オリンパステルモバイオマテリアル(株)執行役員、同24年代表取締役社長。



かすが としひろ  
春日 敏宏氏

春日敏宏氏は、リン酸やケイ酸イオンが導く特徴的な化学的・生理学的効果を利用して機能設計する独自の手法を築き、高プロトン伝導性電解質材料の創製や骨形成を促進する生体材料の設計への新しい方向性の提案等に結実させている。それらの中には実用化に繋がっているものもあり、セラミックス科学および産業の発展に大きく貢献している。これまでに、本協会代議員、教育委員会委員(委員長・理事を含む)、生体関連材料部会幹事・

部会長、科学・技術委員会委員、その他の任を務め、本協会活動への貢献は多大である。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和56年3月名古屋工業大学工学部無機材料工学科卒業、同58年3月同大学院工学研究科修士課程修了。同年4月HOYA(株)入社、平成3年7月名古屋工業大学助手、助教授を経て同16年4月より教授。

かとう かずみ  
加藤 一実氏

加藤一実氏は、集積化エレクトロニクスのための溶液化学を一貫して追求し、前駆体構造制御による強誘電体薄膜の低温結晶化、非鉛系圧電体の配向集積による特性向上、多孔質酸化物膜のその場構造形成と光触媒活性の向上に関する研究を展開し、関連分野の発展に寄与した。近年はナノクリスタル科学へ視野を広げ、ナノメーターで均一サイズの立方体状単結晶(ナノキューブ)の合成、その配列集積したスーパー結晶膜の形成、ナノキュー

ブと三次元界面が誘発する特異性質に関する先導的結果を創出した。研究成果は、従来セラミックス技術の延長線上にない非連続な技術開発の扉を開く鍵となった。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 平成元年3月名古屋大学大学院工学研究科博士後期課程修了。産業技術総合研究所研究グループ長等を経て、同25年4月首席研究員、現在に至る。

きじま かずのり  
木島 弉倫氏

木島弉倫氏は、セラミックス製造の国有特許SiCナノ粒子製造と焼結体作成を住友系企業で事業化、人工ダイヤモンド合成とコーティングを三菱系企業で商品化した。セラミックス研究では $\alpha$ - $\text{Si}_3\text{N}_4$ の熱力学計算、空気中での非酸化物作成の困難と克服法、単結晶作成、単結晶X線回折、メスパワー測定等の結果を協会誌、American Ceramics誌、Jof Material Science誌等に発表、世界で認められ、ケンブリッジ大学、米国MIT、ケースウエスタン大学からオファーを

受けた。また協会理事として約10年間務め、平成4年学術賞、100周年記念事業副委員長、120周年賞ほか多数受賞、よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和43年4月科学技術庁上級(現文部科学省)入庁、MIT博士研究員指導、同53年工学博士(東京工業大学)、平成16年4月The American Ceramic Society, Fellow, The World Academy of Ceramics, Member, 同18年4月京都工芸繊維大学名誉教授。

きつかわ しんいち  
吉川 信一氏

吉川信一氏は、結晶化学に基づいた固体化学分野の発展に貢献した。新規機能性無機材料の創出に関する研究では、とりわけリチウムイオン電池用電極材料への大きな利用が広まったさまざまなインタカレーション材料、および新しい誘電体材料として注目を集めている窒素化合物ペロブスカイトなどの窒素を含む無機固体などを発見した。また本協会においては副会長、基礎科学部会長、東北北海道支部長、学術論文誌編集委員長等を歴任した。

よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和54年3月大阪大学大学院理学研究科修了、理学博士。同年4月大阪大学産業科学研究所助手、助教授を経て、平成12年4月北海道大学工学研究科教授、同27年4月より同特任教授、名誉教授、現在に至る。

こうもと くにひと  
河本 邦仁氏

河本邦仁氏は、金属酸化物の格子欠陥化学、生物に学ぶセラミックスの低温合成、熱電変換材料等の研究によりセラミックス材料科学の進歩発展に大きく貢献した。また、学術論文誌編集委員長、東海支部長、基礎科学部会長、電子材料部会AECA初代チェアマン、PacRim(Nagoya)事務局長、副会長等を歴任し、協会活動に多大な貢献をした。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和49年3月東京大学工学部卒業、昭和54年3月同大学院博士課程修了(工学博士)。同4月東京大学助手、同57年講師、同61年助教授、平成4年4月名古屋大学教授、同27年4月豊田理化学研究所フェロー。名古屋大学名誉教授、米国セラミックス協会フェロー、国際セラミックスアカデミー会員、平成5年フルラス賞、同25年紫綬褒章。

さかい ひろあき  
阪井 博明氏

阪井博明氏は、昭和53年から平成25年まで日本ガイシ(株)に勤務し、セラミックスの研究開発に従事した。セラミックスの微構造と特性の関係に関する研究、窒化ケイ素等の非酸化物セラミックスの解析研究、多孔体セラミックスの材料開発を通じて、セラミックスの製品適用を推進するとともに、低環境負荷セラミックス製造技術開発にも寄与した。また本協会の理事(資源・環境関連材料部会長)、東海支部副支部長、セラミックス誌編集

委員などを務め、協会の運営と発展にも貢献した。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和53年3月名古屋大学大学院工学研究科原子核工学専攻修了、博士(工学)。同年日本ガイシ(株)入社、平成7年研究開発本部材料研究所長、同18年執行役員、同25年退任。

さかべ ゆきお  
坂部 行雄氏

坂部行雄氏は(株)村田製作所に入社以来、電子セラミックス開発と技術育成に指導的役割を果たしてきた。特筆すべき成果例として、昭和50年、世界に先駆けてNi電極積層コンデンサ材料の開発に成功し、全世界で年間3兆個の生産と1.3兆円の売り上げ規模に至っている。また、チタン酸バリウム系誘電体の耐還元性機構を欠陥化学を基に解明し、欧米学会からも高く評価された。同氏は本協会の活動にも積極的に参画し、関西支部役員

を平成元年来10数年間務め、支部長を経て平成14年度から4年間副会長として協会の発展に貢献した。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和45年3月金沢大学大学院理学研究科修了、同年4月(株)村田製作所入社、平成20年取締役専務執行役員、同23年11月東京工業大学大学特任教授、米国セラミックス学会フェロー、国際セラミックスアカデミー会員。



さっか よしお  
目 義雄氏

目 義雄氏は、種々の手法によるセラミック微粒子の作製、強磁界や電界印加下でのコロイド成形によるセラミック配向体や積層体の創製、成形と焼結の高度化による超塑性セラミックスや多機能セラミックスの作製に成功する等、セラミック微粒子プロセスの高度化に大きな貢献をした。これらの成果により日本セラミックス協会学術賞(平成17年)、優秀論文、総説賞(同18年、23年、24年、27年)等を受賞した。また、原料部会会長、学術

論文誌編集委員長、協会誌編集委員長等を務め協会活動に貢献した。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和58年3月九州大学大学院総合理工学研究科博士後期課程修了(工学博士)。同年4月科学技術庁金属材料技術研究所入所、平成23年4月より物質・材料研究機構先端材料プロセスユニットユニット長、現在に至る。



しばさき やすお  
芝崎 靖雄氏

芝崎靖雄氏は、ファインセラミックス振興策策定関与、日本の窯業原料編纂、人工粘土、水可塑性成形、セラミック建材、技術研究組合設立運営、人工粘土研究会設立、湿式弁柄、Co被着形 $\gamma$ - $\text{Fe}_2\text{O}_3$ 磁性粉、結晶釉と干渉色発現機構、天然貝須の成因と解析と合成・可塑性粘土資源、その評価法の確立・粘素の発見・同定(糖アルコール類)、可塑性発現機構説明、カオリナイト、アルミナ質人工粘土、高純度アルミナ等の水可塑性成形法確立、ナノ細

孔径活用の調湿建材の発明等、陶磁器・セラミックスの根幹問題を解明した。また、協会賞選考委員会委員や陶磁器部会長等、本協会への貢献によって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和48年3月大阪大学理学部研究科博士課程修了。同年4月戸田工業(株)創造部、同50年4月名古屋工業試験所陶磁器部門入所、平成4年4月名工試研究企画官、調査官、同13年4月産総研産官コーディネータほか歴任。



すやま ようこ  
陶山 容子氏

陶山容子氏は、セラミック超微粉体の気相合成と粒子生成機構に関する先駆的研究や複合金属アルコキシドを前駆体とするセラミック超微粒子の新規合成法の開発と評価に関する研究、ナノ粒子から成る光触媒繊維の創製と応用に関する研究等で超微粒セラミックス合成の科学・技術の発展に貢献した。また、本協会の行事企画委員会、学術論文誌編集委員会、協会誌編集委員会、科学技術委員会および出版委員会委員、中国四国支部長、理事、

副会長等の各種役職を歴任し、その活動を通して協会の発展に貢献した。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和47年3月京都大学薬学部卒業。同50年5月九州大学工学部助手、同56年3月MIT博士研究員、同60年8月JFCC主任研究員、平成8年4月鳥根大学理工学部教授、同20年10月日本学術会議連携会員、同27年4月無機材料総合研究所代表。



たかぎ ひろし  
鷹木 洋氏

鷹木 洋氏は、昭和44年に本協会に学生会員として入会以来47年間にわたり協会活動に携わってきた。研究活動においては、耐アルカリ性ガラスやイオン導電体、誘電体セラミックス等についての業績を年会、シンポジウムで発表するとともに協会誌への執筆を行い、セラミックス研究に貢献した。また誘電体セラミックスの工業化に長年従事し、平成20年度協会技術賞を授与される等セラミックス産業の発展にも寄与した。協会活動におい

ては、理事、協会賞選考委員、経営審議会委員、科学技術委員会委員、アドバイザーボードメンバー等を歴任して協会の発展に貢献した。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和53年3月京都大学大学院工学研究科博士課程単位取得退学、平成6年3月(株)村田製作所入社、材料統括部長、執行役員、顧問、同28年2月退任、同20~23年度大阪大学先端イノベーションセンター客員教授。



たかた まさすけ  
高田 雅介氏

高田雅介氏は、長年、ガスセンサ等の電子材料セラミックスや水を含むガラスの研究に従事、最近では、革新的構造材料の研究も行っている。また、ISO/TC206(ファインセラミックス)WG4日本代表として2001年国際標準制定に貢献した。昭和57年5月日本セラミックス協会進歩賞、同7年5月同学術賞、平成4年11月フルラスパシフィック賞、同24年10月American Ceramic Society Fellow、同25年6月World Academy of Ceramics Academician、平成13年本協会行事企画

委員会委員長、同19年電子材料部会長、同24年副会長等を歴任、よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和51年3月東京大学大学院工学系研究科博士課程修了(工学博士)。同51年4月同大学工学部助手、同55年4月長岡技術科学大学助教授、平成3年4月教授。同19年4月工学部部長、工学研究科長、副学長。同21年9月理事・副学長、同24年4月JFCC専務理事、材料技術研究所長、ナノ構造研究所長。



たなか じゅんぞう  
田中 順三氏

田中順三氏は、生体内における骨の自己組織化現象を工学的に解明し、骨類似構造をもった新規コラーゲン・アパタイト複合体を創出した。得られた複合体は企業に移管され骨再生が可能な骨補填材として臨床応用されている。並行して、水酸アパタイトからなる人工骨2種類[高強度泡状多孔体および一次元配向性多孔体]を実用化してセラミックス系医療機器の産業発展に貢献した。さらに同氏はセラミックス協会の運営委員会委員長、生体

材料関連部会長、賞選考委員会等として協会活動に貢献してきている。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和47年3月静岡大学理学部化学科卒業。平成13年4月物質・材料研究機構生体材料研究センター長、同16年12月中国四川大学名誉教授、同18年2月東京工業大学教授、同27年3月東京工業大学名誉教授。



なかお やすまさ  
中尾 泰昌氏

中尾泰昌氏は、旭硝子(株)において、ガラス材料開発、特にディスプレイ用基板ガラス開発を主導し、事業化へ貢献した。また、E&E事業本部技術開発部長、生産技術センター長、ガラスカンパニー技術本部長を歴任し、商品と生産技術開発を牽引した。平成24~25年本協会ガラス部会長在任中は、ガラスおよびフォトンクス材料討論会英語セッションの始動、ICG夏の学校(欧州)への学生派遣支援システム確立、ICG年会招致等国際化

を推進した。同25~26年副会長としても運営に携わった。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和55年東京工業大学大学院修士課程修了。同年旭硝子(株)研究開発部入社。同62~平成元年レンスレア工科大学研究員。同18年執行役員中央研究所技師長。同25年常務執行役員ガラスC技術本部長。同28年エグゼクティブ・フェロー。同24年~ICGカウンスルメンバー。



にいほら こういち  
新原 皓一氏

新原皓一氏は、希土類元素の分離精製と高純度希土類金属の創製、CVD法による非酸化物セラミックスの高速創製、破壊靱性評価法(新原の式)の提唱、世界に先駆けて提案したナノコンポジット化による各種セラミックスの機械的特性の大幅改善と100種以上の機能調和ナノコンポジットの開発に成功し、その成果を1000編以上の学術論文として公表し、セラミックス分野の新展開に多大な貢献をした。また、関西支部長、エンジニアリング部

会長、協会会長、ICC3の委員長として活動し、協会の学術賞、米国セラミックス協会のフェロー・名誉会員を含め国内外から多数の受賞を受けている。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和43年3月大阪大学大学院工学研究科修了。東北大学助手、助教授、防衛大学校教授、大阪大学教授、名誉教授、長岡技術科学大学教授を経て、平成21年9月同大学長。同27年9月同名誉教授。



にわ やすし  
丹羽 紘一氏

丹羽紘一氏は、富士通研究所において早くから電子機器用セラミックス研究に取り組み、当時樹脂基板が主流であった大型コンピュータ回路基板をセラミックスで多層化することに成功、回路基板分野で世界の先駆けとなった。この材料技術に関し種々の研究発表の場で議論を重ね、新分野の発展と普及に貢献した。また、本協会の理事として電子材料部会長、出版委員長、関東支部長等多くの要職を務め、協会活動を通してセラミックスの技術発展に

貢献した。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和39年3月千葉大学文学部物理科(現、理学部物理学科)卒業。同年4月富士通(株)入社。同60年厚木研究所無機材料研究部長。平成11年常務取締役兼材料技術研究所長。同14年常務取締役兼富士通分析ラボ社長。同15年常任顧問。同16年顧問。現在神奈川工科大学客員研究員。



のがみ まさゆき  
野上 正行氏

野上正行氏は、ガラスの作製手法としてのゾル-ゲル法に早くから取り組み、基礎研究に加え光学・電気的特性に優れた数多くのガラスの開発を行ってきた。特にナノ粒子ドープガラスの非線形光学特性、希土類イオンドープガラスの常温スペクトルホールバーニング現象の発現とメカニズム解明、プロトン伝導機構の解明と高導電性ガラスの開発研究で独創的な成果をあげセラミックス研究の発展に貢献してきた。平成22~23年度理事・ガラス部会長としても

協会の活動を支援してきた。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和48年3月名古屋工業大学大学院修士課程修了。同48年4月セントラル硝子(株)。同49年7月工業技術院大阪工業技術試験所。同62年4月愛知工業大学。平成6年3月名古屋工業大学。同26年4月豊田理化学研究所。



ひらお かずゆき  
平尾 一之氏

平尾一之氏は無機材料の機能を外部場により精密制御する研究に多大な貢献を果たしてきた。中でも、ガラス内部に新たな構造を空間選択的に誘起させた超短パルスフェムト秒レーザープロセッシング技術は世界の最先端を走り、光集積デバイスや超高密度メモリ、積層基盤配線、高機能ディスプレイ等、加工にも実用化されている。これらの成果は600篇以上の原著論文として公表されるとともに、本協会における副会長、国際交流委員長、編集委員長等歴任、経済

産業大臣賞、ICG Gottardi 国際賞、米国セラミックス協会 Morey 賞、フェロー称号、独国 Otto-Schott 賞、米国材料学会 Cooper 賞、中国科学院国際学術貢献賞、紫綬褒章等が授与されている。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和49年京都大学工学部卒業。同大学大学院工学研究科博士課程修了。同大学工学部助教授を経て、平成10年より同教授。同26年より京大ナノテクノロジーハブ拠点長を兼任。



ひらの しんいち  
平野 眞一氏

平野眞一氏は、炭素の加圧下黒鉛化、多くの酸化物、フッ化物結晶の水熱合成、成長機構等の研究で無機結晶合成、長年にわたる金属有機化合物分子を前駆体とした分子レベルケミカルプロセッシングによる機能性セラミックスの低温合成と微構造制御、セラミックナノ粒子・有機ハイブリッド材料合成と機能評価の先駆的研究で分野の発展に多大な貢献をした。また、本協会会長、アジア・オセアニアセラミック連盟や国際セラミック連盟会長

としてセラミックスの学術、産業の発展に尽くした。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和40年名古屋大学工学部応用化学科卒業。同45年同大学院博士課程修了(工学博士)。東京工業大学助手、助教授(その間ペンシルバニア州立大学)。同53年名古屋大学工学部助教授。同58年教授、工学部長・工学研究科長を経て、平成16年総長。同21~24年大学評価・学位授与機構長。



ふなくぼ ひろし  
舟窪 浩氏

舟窪 浩氏は、有機金属化学気相析出法(MOCVD法)等の幅広い製膜法を用いて、高品質セラミックス薄膜の開発やその特性解明について一連の研究を行ってきた。強誘電体メモリ用薄膜、アクチュエータ応用圧電薄膜、新規環境適応型非鉛強誘電体膜、サイズ効果フリー特性を持つ誘電体膜、蛍石構造強誘電体薄膜の作製と物性評価に関する研究等の学術的成果があり、セラミックス研究に貢献している。よって、日本セラミックス協会

フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和63年東京工業大学大学院理工学研究科修士課程修了。平成24年同大学大学院総合理工学研究科教授。同25年元素戦略研究センター兼務。同8年日本セラミックス協会進歩賞。同20年同学術賞。



まきしま あきお  
牧島 亮男氏

牧島亮男氏は、昭和50～59年度評議員、同60～61年度理事(セラミックス誌編集副および委員長)、平成元～2年度(学術論文誌編集副および委員長)、同8～22年度理事、同8～11年度国際交流委員長、同10～16年度科学技術研究委員長、同13～16年度副会長、同17年度会長、同22～27年度経営諮問委員、顧問、国際セラミックス連盟 Secretary-treasurer, Vice president, President, 国際ガラス委員会、ICGへの協会代表技術委員会委員等を務め、国際会議

を複数開催、国内外活動による協会発展に貢献大きく、よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和41年3月東京工業大学工学部卒業、同46年同博士課程修了。同年同大学助手、同年9月～49年8月UCLA博士研究員、同52年無機材質研究所研究員、同総合研究官、同63年東京大学工学部教授、平成12年北陸先端科学技術大学院大学教授、副学長、特別学長顧問、同22年シニアプロフェッサー。



みずたに のぶやす  
水谷 惟恭氏

水谷惟恭氏は、セラミックプロセス、特に、粒界現象、単分散微粒子合成や酸化物質膜におけるエピタキシャル成膜でのバッファ層機構と特性解明などへの貢献、本協会のセラミックス誌、論文誌の編集委員長として誌面の改革、投稿論文の増加策と特集策、行事企画委員長として会員増強策、秋季シンポジウムの新たな試みと多様化、電子材料、関東支部等の委員会や部会の委員長として産業界、地域との繋がり対策の貢献、および政

府委員会や研究機関の評価等の委員として教育界、産業界と連携活動への貢献してきた。よって、セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和45年東京工業大学大学院博士課程修了(工学博士)。以後同大学助手、助教授、教授、この間、工学部長等歴任。平成17年東工大退職、同18年国立東京工業高等専門学校校長、同22年豊橋技術科学大学監事。



みなみ つとむ  
南 努氏

南 努氏は、ニューガラス研究の分野で顕著な研究業績をあげた。代表的成果として、超イオン伝導ガラスの開発、電子伝導性のガラス半導体ではn型ガラスの開発、ゾル-ゲル法では超撥水、無反射等の特徴を有する機能性薄膜の開発に成功したこと等である。これらの成果に対し本協会進歩賞、学術賞、日本化学会学術賞、米国セラミックス学会や、日本化学会のフェロー等、多数の賞や称号を授与されている。協会活動としては、ガラス部

会、基礎科学部会を中心に活動し、平成10年5月から2年間関西支部長、4年間本協会の理事を務めた。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和41年3月大阪府立大学大学院工学研究科修士課程修了。同年4月同大学助手、同61年教授、平成13年学長、同17年理事長・学長、同21年3月退職、同年4月～24年3月大阪府立産業技術総合研究所所長。



みやけ みちひろ  
三宅 通博氏

三宅通博氏は、本協会の出版委員会、基礎科学部会、資源環境関連材料部会、中国四国支部の活動に貢献し、理事(委員長、部会長、支部長)を務めた。特に出版委員として「セラミックス工学ハンドブック(第2版)」、「はじめて学ぶセラミック化学(改訂第2版)」等の編集を精力的に行った。また2015年年会の現地実行委員長を務めた。研究面では年会サテライトで環境・エネルギーに関する研究発表会を開催し、さらに秋季シンポジウムの環

境関連特定セッションのオーガナイザーとして、セラミックス研究の環境分野における発展に貢献した。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和54年3月東京工業大学大学院総合理工学研究科博士課程修了(工学博士)。同56年6月より山梨大学工学部助手、群馬大学工学部助教授、岡山大学大学院教授を経て、平成27年3月定年退職、現在特任教授。



みやま まさる  
宮山 勝氏

宮山 勝氏は、長年にわたり、センサ用半導体セラミックス、強誘電体、電池用材料等の機能性セラミックスの基礎と応用に関する研究を行い、多くの業績をあげている。その成果により、昭和63年本協会進歩賞、平成17年学術賞、同14・21年優秀論文賞を授与されている。年会、秋季シンポジウム、関連討論会における指導学生の受賞もこれまでに25件を超えている。また、同18～24年本協会理事、同23年電子材料部会会長を務め、協会活動にお

いても多大な貢献をしている。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。

**略歴** 昭和52年東京大学工学部卒業、同54年同大学大学院博士課程退学。同年同大学助手、同62年工学博士、平成13年同生産技術研究所教授、同先端科学技術研究センター教授を経て、同26年より同大学院工学系研究科教授。



むらやま のりみつ  
村山 宣光氏

村山宣光氏は、電子導電性セラミックスの微構造制御技術に取り組み、酸化物高温超電導セラミックスの粒子配向焼結技術の開発と限流器への応用および酸化物熱電セラミックスによる排熱発電を他に先駆けて実証した。また、高速応答抵抗型酸素センサ等を開発し、本協会学術賞を受賞、さらに、「高温電子セラミックス」のコンセプトを提案し、SiCパワー半導体パワーモジュールに不可欠な高耐熱電子部品の開発を先導した。氏は産学官連携の

国家プロジェクトを主導、本協会では電子材料部会の部会長を務める等、同部会の運営に貢献している。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。  
**略歴** 昭和59年3月京都大学大学院工学研究科電子工学専攻修士課程修了。昭和61年4月工業技術院名古屋工業技術試験所(現産業技術総合研究所)入所、平成4年9月博士(工学)(東京工業大学)、同27年4月産業技術総合研究所材料・化学領域長。



やすい いたる  
安井 至氏

安井至氏は、固相反応を酸素充填構造の変化と陽イオンの拡散から捉えるテーマで工博を取得した。その後、非晶質構造論に取り組み、詳細な構造モデルに基づく解析法によりシリケート系やフッ化物系ガラス構造の理解を深めた。物性については、ガラスの硬度を有限要素法解析によって解析し、ガラス構造との関係を明らかにした。その後は、薄膜の形成法による構造と物性との関係等の新規知見を得た。東京大学国際産学協同研究センター長として、共同研究

のあり方、大学側の体制の整備などにより成果をあげた。協会活動では、運営面で総務理事などを歴任した。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。  
**略歴** 昭和43年東京大学工学部卒業。同48年同博士課程修了、工博。平成4年同生産研教授、国際産学共同センター長等。同15年国際連合大学副学長。同22年(独)製品評価技術基盤機構・理事長。同27年より(一財)持続性推進機構理事長。



やすだ えいいち  
安田 榮一氏

安田榮一氏は、セラミックスの粒界構造を解析し高温クリープの改善、SiC ウィスカーとの複合材を開発し靱性の向上、炭素繊維・炭素複合材料の組織制御による特性制御、耐酸化性の向上、カーボンアロイの提唱等の研究を進め、学会・産業界の発展に貢献した。協会活動においては、日本工業標準調査会(JIS)の窯業部会委員、国際誌JMR誌やCarbon誌等の編集委員として活躍し、複合材料学会副会長、日本学術振興会・産学協力

研究委員会・炭素材料第117委員会委員長、本協会高温構造材料部会長、標準化部会委員、副会長、会長等要職を務め学協会に貢献した。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。  
**略歴** 昭和46年3月東京工業大学大学院化学工学専攻博士課程修了。同46年4月同工業材料研究所助手、同57年9月助教授、同63年11月教授、平成11年4月同応用セラミックス研究所長。同20年3月同名誉教授。



やまざし ちたけ  
山岸 千丈氏

山岸千丈氏は日本セメント(株)入社後、アルミナ磁器や合成ムライト・焼結アルミナ等耐火物原料の工業的製法の確立・市場展開を行い、サイアロン粉末の工業的合成法、焼結法等を開発、100KW級自動車用セラミックガスタービン用耐熱部品の委託研究にも取り組み、炭化けい素-アルミニウム、炭化けい素-金属シリコン等の金属基複合材料(MMC)大型精密部品の工業的製造法を開発した。また、運営企画、高温材料部会、セメ

ント部会長や理事、副会長、監事等を歴任し産学の交流を促進、本協会の発展にも多大な貢献を成した。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。  
**略歴** 昭和40年東京工業大学修士課程修了後、日本セメント(株)入社、研究所・工場・本社勤務を経て、昭和63年中央研究所新材料研究部長、平成7年取締役中央研究所長、同10年太平洋セメント(株)常務取締役、同14~16年セラックス(株)代表取締役社長。



やまもと しげる  
山本 茂氏

山本茂氏は、永年特殊ガラスの材料設計や物性評価、研究開発に携わり、ガラス産業の発展に貢献した。特に、電子部品用ガラスやディスプレイ用ガラス、ガラス繊維、結晶化ガラス等の製品開発とその事業化で成果をあげた。本協会活動においては、理事を6年間務め、その間にガラス部会長および関西支部長として、部会・支部の活動を牽引した。ガラス部会では、国際ガラス委員会の委員として海外との研究交流等を進めるとともに、国

内ではガラス産業連合会等の産業界との連携に尽力した。関西支部では、行事企画を活性化し、支部活動を発展させた。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。  
**略歴** 昭和53年3月京都大学大学院工学研究科修士課程修了。同53年4月日本電気硝子(株)入社、平成17年6月同社取締役就任、同28年3月同社取締役退任、特別技術顧問就任。



わたり こうじ  
渡利 広司氏

渡利広司氏は、エンジニアリングセラミックス(AIN, Si<sub>3</sub>N<sub>4</sub>, SiC)の熱伝導研究、助剤探索やプロセス開発による世界最高レベルの高熱伝導材料と低温焼結技術の開発に成功、熱伝導解明のための局所領域熱伝導率測定技術の開発、粒子内の異方熱伝導の解明等セラミックス熱伝導分野の研究進展に大きく貢献した。本協会行事企画委員長として秋季シンポジウムへのオーガナイザー制導入、J.Ceram.Soc. JapanのGuest Editor等学術論文誌の高品質

化に貢献してきた。よって、日本セラミックス協会フェロー表彰に値するものとして推薦する。  
**略歴** 平成2年3月長岡技術科学大学大学院修了(工学博士)。同年4月名古屋工業試験所(現産業技術総合研究所)入所、研究グループ長、旭化成(株)等を経て、現在産総研上席イノベーションコーディネータ兼マーケティング室長。